

短報

辻 圭子¹: 岩手県御所野遺跡から産出した平安時代のナシ属炭化果実Keiko Tsuji¹: Carbonized *Pyrus* fruits of the Heian period
from the Goshono site in Iwate Prefecture, northern Honshu, Japan

Abstract Carbonized fruits of *Pyrus* were discovered from a pit dwelling of the Heian period at the Goshono site in Iwate Prefecture. From their morphology they could possibly be fruits of *Pyrus usuriensis* Maxim.

岩手県北部、二戸郡一戸町の御所野遺跡（北緯 40° 11′ 東経 140° 39′）は、標高 190 ~ 200 m の馬淵川の河岸段丘上に位置し、主に縄文時代から平安時代の遺構を含む集落遺跡である（図 1）。そのうち十和田 a テフラの上位からは平安時代の竪穴住居が多数検出され、住居内の床面からは多数の炭化した植物遺体が採取された。辻ほか（2004）は当時の植物利用の実態を明らかにするために、これらの植物遺体を検討し、炭化したアワ、イネなどの栽培植物を含む種子・果実遺体群の組成を記載した。その際、産出例がきわめて乏しいナシ属果実について簡単な記載をしたが、ナシ属の系譜を解明する上で貴重な資料になると考えられるので、ここで詳細な記載を行い、近縁な分類群との比較検討を行う。

炭化果実の産出状況

ナシ属の炭化果実遺体は遺跡の東側 1 調査区に位置する竪穴住居第 111 号址（GSN-111）から採取された（図 1）。この住居址は東西 4.44 m、南北 4.46 m のほぼ正方形で、カマドの存在を示す煙道を持つ。焼失住居址のため、焼失によって炭化した家屋構造材や屋根葺材とともに多数の炭化種実類が検出された。もっとも多いのはアワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. の果実で、アワ果実が付着したままの花序（穂）もみられた。このほかアサ *Cannabis sativa* L. var. *indica* Lam. の種子、マメ科 Leguminosae の種子、ベニバナ *Carthamus tinctorius* L. の果実、イネ *Oryza sativa* L. の胚乳などが産出した（辻ほか、2004）。

結 果

ナシ属と同定できる保存良好な果実は 5 個産出した（図 2）。5 個とも完全な形ではなく、残存部から推定すると、直径 5 ~ 15 mm の球形で（図 2-1）、果頂部には萼片が外側に開くように残り、残存する萼片の先端が波状となる（図 2-2）。果柄の一部が残存し（図 2-4）、果柄の表面には瘤状の皮目が見られる（図 2-5）。果実は果柄部で窪むこと

がなく、基部が少し張る（図 2-4）。果実表面には細かく小さい円形の皮目が多数見られるが、瘤状に盛り上がることはない（図 2-2）。果実の横断面では 5 室が確認できる（図 2-3；そのうちの 3 室が見える）。果肉と果芯部内には石細胞が見られる（図 2-1, 4, 6）。また果芯線が形成されている。種子は長さ 7.5 mm、幅 3 mm の涙状形で臍点は尖り（図 2-7）、断面形は扁平で、表面はほぼ平滑で種子の縁に弱い稜が見られる。

果実が球形に近く、果肉に石細胞をもつものにはナシ属と、リンゴ属のオオウラジロノキ *Malus tschonoskii* (Maxim.) C. K. Schn. がある（大橋ほか、1989）。オオウラジロノキの果実は球形で、頂端に裂片が残って直立し、多数の皮目があり、石細胞がある（大橋ほか、1989）。御所野遺跡出土の炭化果実は、現生果実と比較すると、果

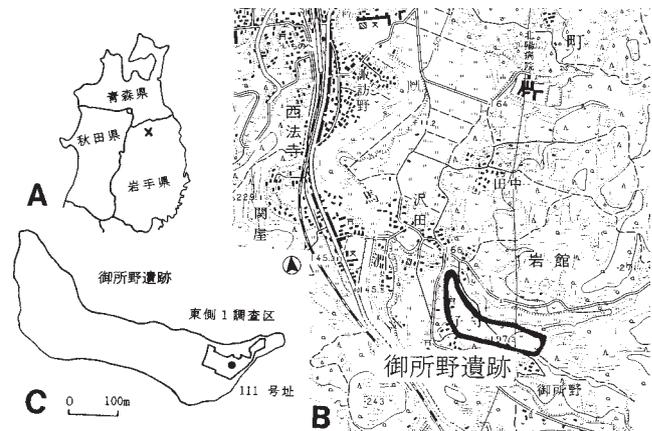


図 1 ナシ属炭化果実出土地点。— A: 一戸町位置図, B: 御所野遺跡位置図 (国土地理院発行 25000 分の 1 地形図「一戸」を使用), C: 御所野遺跡内東側 1 調査区範囲 (●: 竪穴住居第 111 号址; 一戸町教育委員会 (2004) を改変)。

Fig. 1 Place of discovery of charred *Pyrus* fruits. — A: location of Ichinohe cho, B: location of the Goshono site, C: excavation plot east No. 1 (filled circle: pit dwelling No. 111).

¹ 〒 285-8502 千葉県佐倉市城内町 117 国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History, 117 Jonai-cho, Sakura-shi, Chiba 285-8502, Japan

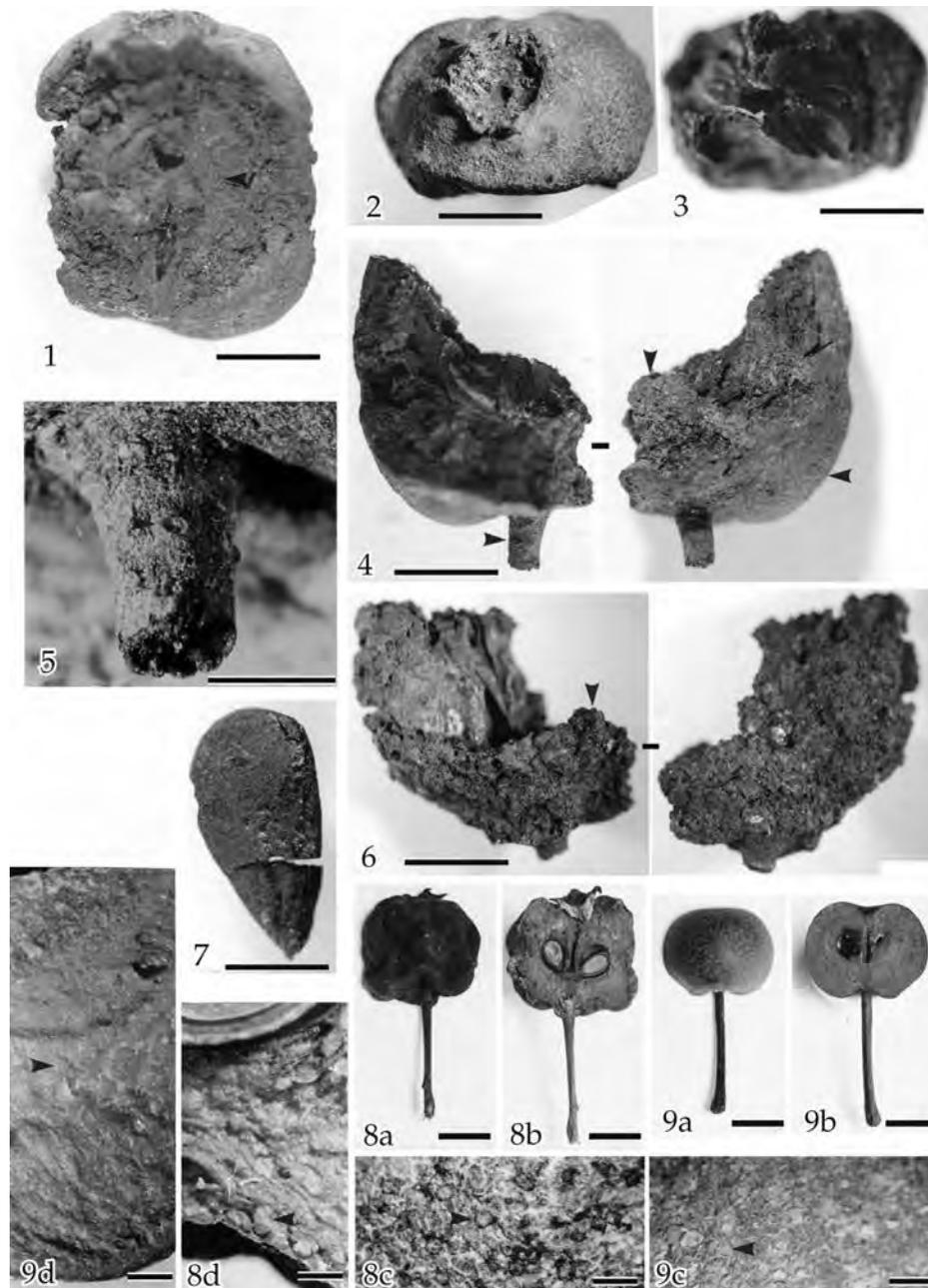


図2 御所野遺跡竪穴住居第111号址から出土したナシ属炭化果実。— 1: 縦断面 (果肉部とその境界をなす果芯線 (矢印) が見える; GSN-98 no. 50-1), 2: 果頂部 (中央には萼片 (矢印) が残存する; GSN-98 no. 50-2), 3: 横断面 (内果皮によって囲まれた空隙が見える; GSN-98 no. 50-2), 4: 縦断面 (果実基部の果柄の着点は窪んでおらず (左下矢印), 果実表面には皮目 (右下矢印) が, 果実断面には石細胞 (中央上矢印) が見える; GSN-98 no. 50-3), 5: 果柄の拡大 (基部が少し張る; GSN-98 no. 50-3), 6: 縦断面 (果肉部に石細胞 (矢印) が見える; GSN-98 no. 51), 7: GSN-98 no. 51 (図2-6) の果実から抽出した種子, 8: 現生ミチノクナシ果実 (大阪市立大学理学部附属植物園採取4A0143) [4916] (a: 側面観, b: 縦断面, c: 果皮表面の皮目, d: 縦断面の石細胞 (矢印)), 9: 現生ヤマナシ果実 (岐阜県白川村) [4332] (a: 側面観, b: 縦断面, c: 果皮表面の皮目, d: 縦断面の石細胞 (矢印)). スケール= 5 mm (1-4, 6), 1 mm (5, 7, 8c-8d, 9c-9d), 1 cm (8a-8b, 9a-9b). GSN-98: 御所野遺跡遺物番号. []: 国立歴史民俗博物館種実番号, 現在は東京大学新領域創成科学研究科に移管。

Fig. 2 Charred *Pyrus* fruits found at pit dwelling No. 111 of the Goshono site. — 1: vertical section (GSN-98 no. 50-1), 2: top of fruit (GSN-98 no. 50-2), 3: transverse section (GSN-98 no. 50-2), 4: vertical section (GSN-98 no. 50-3), 5: pedicel (GSN-98 no. 50-3), 6: vertical section of fruit (GSN-98 no. 51), 7: seed from the fruit GSN-98 no. 51, 8: extant *Pyrus ussuriensis* fruit, 9: extant *Pyrus pyrifolia* fruit. Scale = 5 mm (1-4, 6), 1 mm (5, 7, 8c-8d, 9c-9d), 1 cm (8a-8b, 9a-9b).

表1 日本産ナシ属 *Pyrus* の果実形態 (大橋ほか, 1989 による)
Table 1 Fruit features of Japanese *Pyrus* species (after Ohashi et al., 1989)

分類群名	果実型	直径(mm)	果実皮目	果頂部萼片	日本での分布域
ミチノクナシ (イワテヤマナシ) <i>P. ussuriensis</i> Maxim.	球形, 扁球形, 広倒卵形	20-50	小型で密布	宿存	本州, 九州 (北部) の低山地
アオナシ var. <i>hondoensis</i> (Nakai et Kikuchi) Rehder	球形, 扁球形, 広倒卵形	20-50	少ない	残存	本州 (中部地方)
マメナシ <i>P. calleryana</i> Decne.	ほぼ球形	約 10	円形で小さく多数		本州中部 (三重・長野・愛知)
ヤマナシ <i>P. pyrifolia</i> (Burm. fil.) Nakai	ほぼ球形	20-30	円形で小さく多数		本州, 四国・九州

頂部にかく裂片が大きく残り, 果柄部は窪むことはなく, 果実表面には皮目を密に持つことから, オオウラジロノキとは考えられない。

日本に自生するナシ属には, ミチノクナシ, マメナシ, ヤマナシの3種1変種がある(表1; 大橋ほか, 1989)。出土したナシ属炭化果実は直径10 mm以上のものを含むので, 果実直径が10 mm程度であるマメナシではない。果実が球形で, 石細胞を持ち, 果実表面の皮目の形, 果頂部の窪み, 果頂部のがく片の残り方などの特徴から, 現生のミチノクナシ(大阪市立大学理学部附属植物園ではイワテヤマナシと呼称)(図2-8)やヤマナシ(図2-9)の果実に類似する。よって御所野遺跡で出土した炭化果実は, ナシ属に同定される。

考 察

ナシ属の果実遺体は平城京左京二条二坊・三条二坊に位置する長屋王邸・藤原麻呂邸を囲む溝から大量に検出されている(南木, 1995)。出土例では直径10~15 mmの球形で, 果梗は太くて短く, 萼痕が残っており, 石細胞が確認できることからナシ属果実に同定され, 多くの果実には虫食いの跡があり, 未熟果が多いことから, 平城宮内で栽培されていた可能性を示唆した。

御所野遺跡出土のナシ属果実は, 直径が小さいことから現在の栽培品種と直接結びつくものではないと考えられるが, 平安時代に採取・利用された果実の資料として重要である。辻ほか(2004)は, 果肉部で石細胞が見られること, 果実表面に皮目が密にみられないことから, 御所野遺跡出土のナシ属果実をアオナシに同定した。しかしながら, 大阪市立大学理学部附属植物園植栽のミチノクナシや小石川

植物園植栽のアオナシの果実には変異が著しく, アオナシとミチノクナシの区別は困難であった。したがって, 遺跡から出土する種実類は, 現在知られている変種以外の可能性もあるので, アオナシとの同定は保留し, ミチノクナシの可能性を指摘しておく。

謝 辞

一戸町教育委員会には遺跡出土の炭化果実の資料を提供していただいた。ミチノクナシの採取では大阪市立大学理学部附属植物園植松千代美氏と田村実氏, オオウラジロノキ標本は千葉大学理学部園芸学部百原新氏に, 栽培ナシに関する文献収集には果樹研究所の梶浦一郎氏にご協力をいただいた。小論作成には編集委員長と査読者には有益なご指摘を頂いた, 感謝申し上げます。

引 用 文 献

- 一戸町教育委員会, 編. 2004. 御所野遺跡II, 一戸町文化財調査報告書第48集. 294 pp. 一戸町教育委員会, 一戸町.
南木睦彦. 1995. SD4750・5100・5300・5310 出土の大型植物遺体. 「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書, 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査」(奈良国立文化財研究所編), 534-552. 奈良県教育委員会, 奈良.
大橋広好・初山泰一・大場秀章. 1989. バラ科. 「日本の野生植物, 木本I」(佐竹義輔・原 寛・亘野俊次・富成忠夫編), 179-228. 平凡社, 東京.
辻 誠一郎・辻 圭子・大松しのぶ. 2004. 御所野遺跡出土の古代植物遺体群とその意義. 「御所野遺跡II, 一戸町文化財調査報告書第48集」(一戸町教育委員会編), 288-292. 一戸町教育委員会, 一戸町.

(2008年3月6日受理)